

立場が変わると何が見える



～その9 子どもの自立と養育者の関わり～

坂口 伊都

はじめに

新年度が始まり、あれよあれよという間にゴールデンウィークも過ぎてしまいました。そして、この前まで雪が舞っていたかと思ったら一転して汗ばむ陽気、1日の気温差が10℃以上あったりと寒暖差に身体がついていけません。私は倦怠感を乗り越えるために気合を入れて身体を動かしています。皆さんは、お元気でお過ごしでしょうか。

この春に女子会旅をしました。子どもが保育園時代からのつきあいの家族で、母と娘ペアの4人で広島旅行。ここの家族とは、兄も妹も同じ年で、家族ぐるみでキャンプに行ったり、飲み会をしたり、京都国際社会福祉センターで家族療法を習っている時に「健康家族」として家族面接に駆けつけてくれたこともありました。子どもが成人したので、女性軍だけで旅行をしようとなりました。小さい頃からのつきあいのので、お互いに気をつかわずに過ごせます。

娘たちは、美味しそうなものをいっぱいみつけて牡蠣に広島焼、いちごパフェ、パンケーキと、まだ食べるの？とこちらが驚くペースで食べていました。若い人の胃袋は、たくましい。

食べているだけでなく、美術館や国立原爆死没者追悼平和祈念館に行き、

「暁部隊 劫火へ向カヘリ ―特攻少年兵たちのヒロシマー―

太平洋戦争末期、陸軍の「特別幹部候補生」として船舶司令部(通称「暁部隊」)に配属され、江田島に集められた少年兵たちは、①(マルシ)と呼ばれた一人乗りのベニヤ板製モーターボートで敵艦を撃沈させる特攻訓練を受けていました。

しかし、死を覚悟していた彼らを待ち受けていたのは特攻ではなく、1945年8月6日の原爆投下でした。「本務を捨てても広島市の救護に立て」との命令を受け、急行した彼らが死の街広島で何を見て、何を感じたのか。彼らの心情に迫ります。

企画展 | 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 (hiro-tsuitokinenkan.go.jp) より抜粋

ここで上映されているものは、授業では教えていない広島の人々の物語です。そこに触れたことで娘たちの気持ちが動き、被爆後の焼野原写真の中で、建ち続けていた鳥居に行きたいと言い出しました。親は子どもに連れられながら護国神社に向き、被爆樹木にも出会えました。

この旅行で、親に甘えて好きなものを食べたり、犬がいたり嬉しそうに撫でに行ったり、無邪気な一面を見せつつ、大人の顔になって行動する姿を見せてくれました。これからの娘たちの成長や生き方を隣で見ていることが楽しみです。

前回は、親、養育里親、児童養護施設に関わった経験から見えてきたことを書きました。今回は、子どもが自立しようとする時に大人はどう関わっていけるのか、関わっていく意味について考えていきたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いください。



子どもが大人になっていく過程で

人を援助していく際、最初の介入の手掛かりをどうしたらいいか悩むことがあります。特にその方に所属がないとアプローチが難しくなります。スクールソーシャルワーカーの時は、在学中に子どもとの関係を築きながら、卒業後も社会資源とつながっていけることを大事にしました。

子どもとの関係は、置かれた環境で変化するものです。養育里親、児童養護施設、学校という場所や立場でつながる関わりだと、子どもがそこに所属しなくなると手を差し伸べる根拠を失います。児童養護施設等には、子どもが退所した後のアフターケア事業があります。それも、新生活に問題がなければいずれ終結していきます。退所してから子どもが施設に顔を見せに来てくれることもあります。見知った職員が退職していたり、日々の業務で忙しいことを知っているから頻回に訪れることは難しい。子どもの人権が叫ばれていますが、子どもが卒業や退所してからも大人を頼り続けていいというメッセージを出せずにいるのが今の社会ではないでしょうか。

実親であれば、離婚して子どもと離れて暮らすことになっても「親」という事実は消えず、子どもと会う会わないに関わらず、親子関係は消えません。消えない関係だから、心情的に複雑さを増します。

私には実子が2人います。娘はいろいろな話をしてくれ、家にも度々帰ってきますが、息子の方はめったに連絡をくれません。どうしているのかとメッセージを送っても返事がないのは日常茶飯事です。必要最低限の返事だけで、帰ると言いながら帰ってこない息子です。親や実家が気にならないのかと寂しくもなりますが、息子にも思いがあるのでしょう。

自身の事で言えば、父親とは一緒に暮らした経験がありません。子どもの頃は、母親から会いに行きなさいと言われ、たまに出会うおじさんという印象で、会うことを楽しみにしたことはなかったで

す。それは大人になってからも続き、何となく憂鬱でした。親子の縁は存在し続けますが、親に遠慮や敬遠が先に立っていました。

養育里親をしていた元里子とは、社会的養護の場を自立した今も交流が続いています。別れて暮らすようになってからは、ボランティアとして関わらせていただきました。今は、何でしょうね、友人？知人？どちらもじっくりきません。感覚的には「家族」が一番近い。そうですね、「法的根拠を持たない家族」と言ったところでしょうか。いつも何の権限も持たない己を忘れずに元里子と関わっています。成人しているのですから、必要とされることもありません。

元里子から健康保険のことで相談されても、一緒に動きようがないもどかしさを感じます。誰に相談したらいいのかを考えることはできるので、そこを一緒に話しています。一人で決めようとせず、相談できる相手を持ち続けて欲しいと願っています。

ここぞというような大事な事柄に関わることは難しいですが、会う約束の日に

元里子「自転車のチェーン外れた」

元里母「ガチャガチャって、いっぱい変速変えた？」

元里子「えー、してないよ」

元里父「チェーン外れてからペダル漕いだやろ」

元里子「うん、直るかなって思って」

元里父「完全に外れてるやんけ」

元里母「チェーン外れたの今日で、良かったね」

元里子「うん」

ほくそ笑む元里母と子、そして手を黒くしながら奮闘する父

一緒にご飯を食べたり、釣りに行ったりという程度の関わりは続いています。一緒に外出し、そろそろ帰ろうかという頃に元里子が、

「明日の昼ごはんいるねん」と言い出しました。

「明日、仕事なの？」

「ううん、休み」

「それは、明日のお昼ごはん買ってということだね(笑)」

「お昼ごはん、買って～」と言い直す。

ほんまに可愛いことを言ってくれるようになりました。

ということで、スーパーへ。何を買うのかなと思いながら見ていると、里兄が好きなカップ麺と里姉が好きなグミを選んでカゴに入れる姿に笑ってしまいました。

息子も娘も同じようにスーパーに行くと、食料品や日用品を何も言わずにカゴの中に放り込むので、



どの子も同じだと感じます。これが、ひよこだった子どもに羽が生えて飛び立とうとしている時期の甘え方の一つなのかも知れません。お金に余裕もない時ですから、日用品を買ってもらえると懐があったまって、嬉しくなるのもわかります。

一人暮らしを始めた頃は、自由を謳歌しながらもどこかに寂しさを感じる時期です。親と一緒に暮らしのための準備をしたり、生活の仕方を教えてもらいながら安心感を得ようとするのでしょう。アフターケアは、どの子にとっても社会に飛び込む助走の手助けとして必要なものだ実感します。

大人でも上手にできなくていい

社会的養護の場で、養育者や生活の場所が変わらないで続くことを保障していくことをパーマナンスーと言いますが、実際に保障していくことは難しかったです。里子が自立するまで何とか我が家だと願っていましたが、それは叶わなかった。離れる時は、元里子の自立時期に関われるとは思っていませんでした。

そして、社会的養護の時代が終わり、自立していく中で、頼りにできる人がいることは大事です。息子や娘も同様で、何かあれば駆け込める場所が「父母」になっています。助けてを言うのが上手な娘と下手な息子たちという差はありますが。

子どもは身体も小さく、財力もないので大人、特に養育者の力を必要とします。大人になっても、若いうちは薄給ですが、したいことや欲しいモノはけっこうあり、生活を回していくことに苦労することが多く苛立ったりすることも度々起きます。その時は、愚痴を聞いてもらえる相手が欲しくなり、転職、結婚、離婚等、生きていく中で大きく生活が変化する場面には相談相手が、子育てをしていれば助けてくれる手が欲しくなります。人は群れて生きる生き物ですから、大人になっても頼れる人がいます。それが、養育者である必要はありませんが、子どもの間に大人に頼ったら何とかなるという経験することが必要です。

子育てをしていると時間的余裕や養育者自身の気持ちの余裕がなくなり、子どもに優しい気持ちを向けられなくなる時もあります。その時に養育者が、誰かに助けを求めることも非常に大切なことです。子どもは、養育者の姿をよく見ています。養育者自身の行動を見て、子どもに言っていることが違うと感じると不信感を抱きます。養育者が、完璧な姿を見せる必要はないし、失敗しても人の助けを借りて立て直す姿を見せられる方が子どものためになります。

私の母は、子どもの私によく、「あなたは、私の言う通りにしたら間違えないから」と言っていました。昭和という時代背景もあったのだと思いますが、完璧な親でありたかったのかもしれませんが。親は良かったと思っていたのですが、子どもは自身で立て直せる術があることを学ばず、マイナスに作用していました。

遠い先まで見通せる力があるかと問われれば、3 年後に自分がどうなっているか正確に答えられる人はいません。手前の現実から判断せざるを得ない。今の自分の努力が将来報われるかどうか、誰にもわからない不確かさの中で生活しているのだと感じます。

人は強くもないし、賢くもないようです。上手くいってもいかなくても、迷い続けているところがあるようです。

子どもに伝えたいこと

子どもが大人になり、パートナーを連れてくる日もあるでしょう。その時、子どもが連れてきたパートナーをできるだけ受け入れようと努力する方が多いのではないのでしょうか。反対したところで、親の言うことを聞くとは思えないですし、なかなか結婚しようとしないう時代の若者が、婚姻を結ぼうとしていることに安堵を感じるかも知れません。

また、法的には認められていませんが、ドラマ等で同性婚が社会から祝福されている描写を見かけるようになりました。時代の変化と共に親が子どもの婚姻相手を選ぼうと思わなくなっています。仮に、息子や娘が同性のパートナーを連れてきても、その事実を受け止めようとするだろうと感じます。そのシーンに出会ってはいないので、実際どうなるかは今後のお楽しみです。

子育てを終えて、子ども達はどのように母親を受けとめてきたのか私にはわかりません。ただ、どの子も可愛いと感じています。もう知らんと怒ったこともあります。自分の事より先に子どものことを案じ続け、その感覚は身体に沁み込んでいます。

そして、学校や施設、面接等で出会い、向き合ってきた子どもや親のことも一所懸命に考えました。多くの出会いや貴重な経験から改めて生きていくために知っておくといふことがあると気づきました。それは、

簡単に人生は終わったりしない。終わったように思えても、芽は出てくるし、新たな物語が先に待っているもので、

同じ出来事でも、自分の捉え方で景色が全く変わる。あなたの人生は、人のせいにしようとせず、あなた自身が責任を持ちなさい。

そして、誰かに助けてを言える人になってね。

子どもも大人も、宿り木になれる人が必要です。子ども達には、大事な人との関係を自分でちゃんと考えようとする人になって欲しいと思っています。

